渤海小考 その4

—高句麗 Ⅱ—

森田　豊

《Summary》

A Treaties on Bohai. Ⅳ
—Kokuryo Ⅱ—

Yutaka Morita*

We see the fall of Kokuryo from the anecdotes of several peoples in "History of Triad - nations in Korea"

＊城西大学教授・研究員

高句麗と倭の交流は，新羅の対外政策上の進出行動につられて始まったと見る人々が多くあります。先稿その3（紀要第4号90頁，1998）に見る実聖も関係者の一人として数えられる人物である。「三国史記」新羅本紀によると，新羅第十七代の王，奈勿尼師今（356—402）が392年に高句麗へ送った人質が実聖で，401年まで人質としていた後帰国，奈勿尼師今の没後の新羅第十八代の王（402—417）となった人物である。背長7尺5寸の偉丈夫で，性格は明朗にして闊達，見識の高い立派な人であるとされている。奈勿王の死後，その直子の幼少の故で大西知伊飡の子である彼が後継者となった。403年に倭国と国交を結び，その際に人質を送ったとされるが，その人質は先の奈勿王の王子の未斯欣であったと云はれている。列伝第五に，朴堤上の条がある。それによると，堤上は毛末とも称する人物で，日本書紀では神功紀条中に毛麻利叱智と記されているのに当るとされるものである。

ここでは，倭王が未斯欣を質とすることを申し出たのに対して，実聖自身がかつて奈勿王が自分を高句麗への人質としたことを恨み，その子にその恨みをはらそうと思っていたので，倭王の指名を拒まずに人質として遣わしたとし，更に412年には同様に奈勿王の子で未斯欣の兄である卜好を高句麗の求めに応じて人質として送ったとする。新羅第十九代の王は訥祇麻立干（417—458）である。「三国史記」では，この時以降の新羅の王の名称が変ったものとなっている。実聖までに用いていた尼師今という呼称は，第二代南解次次雄の臨終の際の言葉で定められたとする。当時直子の儒理と娘婿の脱解とに，彼の死後，二人達の朴氏と昔氏との二姓で，年長のものが王位をつぐようにせよと云ったと云はれる。

又，第三代儒理尼師今の即位のとき，第四代となる脱解が，儒理が脱解にその人望の故で先に位を与えようとしたのに云った言葉が関係する。即ち，神器や大宝などをもって王位のような大切な役目につくことは，普通の凡庸な人間では務まるものではありません。聖人とか智者は歯が多いと聞いているので，この二人の間で歯の数を調べることにして餅を噛んでみましょう。その結果は，儒理の方が歯の数で多かったのであった。歯の方言で尼師今と云はれる言葉を王号としたのであるとされる。それから後になって，金氏が抬頭したこともあり，この三姓で年長者が王位につく事となったものであるとされる。

一方，麻立干は，椒（きりかぶ）の事を方言で麻立という事から，位の順序できりかぶを置き，王のきりかぶが中心で，臣下のものがそのもとに並んでいることより，そのように呼ぶとするものである。

訥祇麻立干は奈勿王の長子であり，その王妃は実聖王の娘であるとされる。実聖が高句麗からの帰国後即位までの間に，奈勿王に対する復讐で，その子供達を殺害しようとして高句麗から人を呼んで，まず訥祇を見付けたときは殺すように仕組み，訥祇を外出させそ

の途中で待伏せさせた。即位後もその様な行動を続けていたが，呼び寄せられた高麗人が訥祇の姿や心情の気高さに圧倒された結果，訥祇を殺す事が出来ず，却ってその殺人計画を相手に告白し，不能となった理由を述べて高句麗に帰ってしまった。このことを知り，怨みに思った訥祇は逆に実聖王を殺害し，自ら王位を奪い取り即位したとされている。

その頃堤上は歃良州の干（長官）として出仕していたが，王が倭と高句麗で人質となっている二人の弟達の救出の智恵を求めて，水酒村干の伐宝靺と一利村干の仇里迺及び利伊村干の波老の三人の知名の賢者を集め，救出の智恵を求めた。三人が共に堤上の剛勇と策謀の智恵のある事を口々にして，求に答えたことから堤上が召されることになった。王の頼みを聞いて高句麗に赴いた彼の言葉が出色である。曰く，「隣国と交わる道は，唯一，誠実と信頼あるのみと聞く。もしも質子を交換するとなると，それは五覇の諸業とかわらず誠に末世のことと言う所であります。権謀術策のみを用いて制覇しては国家を富強に導くとは云え，道義と王道を基調とはしておらず，世の崇敬を受けるに及ばない所であります。それこそ，誠に末世の諸行と言える所であります。考えて見るに，今我が国の王の弟君がこの地に来て，将に十年になろうとしています。我が君は鶺鴒の原にいるように，相手を心配のあまり，不安気に鳴きながら飛び交っている如く，兄弟が急難を互いに救け合おうという気持を止めることが出来ず心配をしております。もしも大王が恵みと施されて人質の弟君を帰されても，大王にとっては九牛の一毛が抜け落ちたほどのことで，何の損となることはありません。ひるがえって，新羅の王は高句麗王を大変徳のある大王であると尊敬している所である。」と云ったとされる。この言葉に，高句麗王は堤上と共に卜好を質からとき放す事として帰させた。この事が新羅本紀418年の所に，王弟の卜好が堤上奈麻と共に高句麗から帰国との記事となっている。弟一人を無事に手元につれ帰すことが出来た訥祇は，更に堤上に優しくもう一人の弟も大切に考えている事を述べて依頼した事に対する堤上の言葉も注目である。曰く，「堤上自身の身は国家に捧げたものである。命令の様に努力し，実現を図ることは誓ってその通りである。高句麗の場合は大国であり，その王は賢君であるから堤上の言葉を理解して結果宜しきを得た。一方，倭人如きはその様な弁舌によって理解を得る事は出来ないと考える。方法としては，仕組んで詐謀でもって王弟を帰国させる事しか考えられないのではないか。その為，堤上が倭に赴いたときには，国に叛いて出国して倭に逃げて行ったという報を流して倭に聞かせる様にして下さい。」と言ったと云う。倭の評価がこの様なものであるかとの感である。説話だけの上での話であるのか，その間に何程の真実の実際可能であった事件，事象があったのかは知る事が困難であると考えるが，書き物の上での話を合はせる事で民族の異りによる考え方の色合いの異りに注

目してこの小考を進めている筆者には，色々な話の連りが非常に興味深い。その故に小さな事を注目して書き連ねている事を許されたいと思っている。さて，堤上は無事倭国に侵入，あたかも叛逆の後逃亡して来たかのように振舞い倭王周辺を探り生活を行なうこととなった。倭と良好な関係にある百済からの情報で，新羅と高句麗が相謀って倭を侵略せんとしているとされていた事から倭王は行動を起し兵を新羅境域にまで進攻させ偵察を続けその域を守らせていたという。時に高句麗が侵入し，倭の偵察兵が捕殺されるという事件があり，百済を信ずることが深くなる結果をもたらしていた。又，その他からの情報で，新羅王が未斯欣と堤上の家族を捉えたとするものを信じ，堤上の叛逆が真実と信ずるに至った。ここで，倭王は軍隊を派遣し，新羅を襲撃することとし，堤上と未斯欣を将師に任命して彼等を案内として海中の小島に進駐した。そのとき倭の将師達の密議で，新羅を滅亡させ，未斯欣と堤上の妻子の救出も計画されているというのを聞き及んだ堤上は策を考える事となった。倭人を信じさせてひそかに未斯欣を帰国させる案を考え実行に移した。別れ難く苦しみながら，ひそかに逃げ帰った未斯欣を見届けると，堤上はその策を見破られた後焼き殺されることとなった。このとき帰国した未斯欣を迎えた訥祇王が酒席で歌舞した曲が憂息曲と称して残っているとされる。この下りが，本紀では，418年の朴好の帰国の記述の次に，秋，王弟の未斯欣が倭国から逃げ帰ったと記されているものである。ここに記した事件は，日本書紀中にも見え，神功前紀九年十月の条に，新羅の王波沙寐錦，即ち微叱己知波珍干岐を質としとあり，神功摂政五年三月の条に，新羅の王，汗禮斯伐，毛麻利叱智，富羅母智等を遣して朝貢し，その上先の質の微叱己知（許智）伐旱を奪還しようとの考があり，そこで許智伐旱が嘘を云って，汗禮斯伐，毛麻利叱智等が自分に教えてくれたが，自分が永らく帰国しないので妻子達が官奴にされてしまっている，その故に暫時新羅に帰りたいと云ったという記事がある。そのときに，皇太后は許可して，葛城襲津彦を副えて遣はした所，対馬に到って鉏海の水門に宿ったという。ここで，微叱旱岐を逃走帰国させた上で，床に葬霊を造り（人形を代りに置いて）また寝ている様に詳って病者の様にして死んでしまったと報告もした。襲津彦が手下に調査させた所で欺かれた事を知り，それら使者三人を檻中にとじ込め，火をつけて焼き殺したとあり，その後新羅に至り，草羅城を抜いて帰国したが，その際に俘人とした人々が今の桑原，佐糜，高宮，忍海などの漢人等の始祖となったという記事になっている。「日本書紀」神功前紀の先に示した微叱己知波珍干岐の初出の記事のあとに，是に高麗，百済二国の王が西蕃となって朝貢すると表明をしたという下りがある。事実は別として，既に高麗の認識があることを示すものであると考えられる所である。今少し余談をすると，先述の襲津彦であるが，列伝第五の朴堤

上の前の記載記事に登場する。昔于老の条である。新羅第十代奈解尼師今の子（又は角于水老の子とも云はれるとされる）である于老が伊湌大将軍となり甘文国（慶北金陵郡）を討伐その地を支配下の郡県とした。その二年後（233）倭人が攻めて来たので迎え撃ち，倭の戦艦を風に乗って火を放ち焚き沈没させ，全軍を壊滅させる功を成した。244年に舒弗邯の位に昇進，軍事を任されて高句麗と245年に新羅北辺で戦ったが勝つ事が出来ず，退却をする程の敗戦であったとされる。この事件は本紀にも記載があり，助賁尼師今（第十一代）十六年（245）にも同内容の記載となっていて，敗戦を示しているが，この記事が新羅と高句麗の接触を伝える最初の記事であるとされている。これに比し倭との接触は既に本紀の初めから見られる所である。列伝記事によると，253年に倭国の使臣葛那古が客館に居る折に，于老が接待をしていた。于老は戯れて，そのうちに倭の国王を潮汲み人夫にして働かせ，その王妃は炊事婦にしてしまおうと云ったという。この言葉を伝え聞いた倭王は大いに怒り，将軍の于道朱君を派遣し新羅と戦闘を開始して来た。その折衝に大王に申出て于老が当ることとなり倭軍陣地に出向いて云った。前日言は唯応対の戯れに言った事で，軍を交えてまでの大事となるなど考も及ばないものであるがと。この謝言に対して，倭人は答えず于老を捕え，柴の山の上で焼き殺してしまった。この于老が同道して連れて来た于老の子供は未だ小さく，この事件のときは関係者に連れ帰れられるに馬に乗せて帰ったとされるが，この童子が第十六代王の訖解尼師今となったとされる。この事件ののち，未鄒王（第十三代）の時，倭国の大臣の新羅への来訪があったとされるが，このとき，于老の妻が倭国の使者を私的にもてなしたいと申出，許されると，倭国の使者を泥酔させた上，復讐として焼き殺して，怨みをはらしたことで，倭人との全域での戦いをまねいたが，倭人は勝つ事が出来ず引き返したと記事にある。これらの記載は年代的に二，三の異りや，本紀に記されていないなどがあるが，何らかの交渉があったことと，当時に活躍の戦士又は使臣の名を用いた説話のまとめ合せの記載がある時代層を表はしているものと理解される。このように新羅と倭との接触が，高句麗の存在抜きでは考えられず，引いては倭と高句麗の交渉が新羅の動きにて始まる事となったと見るとする所である。「日本書紀」神功前紀の先に記した微叱己知波珍干岐を質としと記された後に「是に高麗，百済二国の王が密かに軍勢を伺い，勝ち目のない事を察して西蕃となって朝貢すると云った」という下りがあるが，事実は別として，そこに高句麗が認識されていたことを示すものと考えられる。

新羅の外交で，その名を挙げずには済まされない人物に，金庾信と金春秋がいる。高句麗，倭とも関係する人物である。共に７世紀を色どる新羅の雄である。庾信は新羅第二十六代真平王（579—632）の建福十二年（595）に生まれた，金官加邪の王族の子孫で，迎湌

蘇判の舒玄（金逍衍とも云う）の子であるとされる。列伝に多くの頁をついやして記載がある中，公は十五才のとき花郎となった。当時の人々は多くつき従い，龍華香徒と云ったなどとある。同様に金春秋，後の太宗（新羅第二十九代の王）武烈王も，日本書紀孝徳天皇紀中に，春秋は姿顔美しくして善みて談笑すとある如く，花郎であったとされる。新羅本紀真興王の記事中，三十七年（576）春，「むかし源花を奉じていた。その理由は，君臣が有能な人材を見付け出せなくて困っていた。そこで，多くの人を集めて自由に交流させ，それぞれの品行や道義を観察し，その後有能な人材を登用した。やがて，美女二人，その一人を南毛，他の一人を俊貞という，を選び出し，それぞれのもとに三百余人もの仲間が集った。この二人の美女は互いに美しさを競い会って，その分相手を妬んでいた。このことから，あるとき俊貞が南毛を自分の家に呼び入れ，酒を飲ませて酔はせて河に投げ込み殺してしまった。このことが発覚するや，俊貞も殺されることとなり，仲間の中心が失なはれると共にその共同意識が失せる結果とななりその集団は散り散りになってしまった。」それから後になって，今度は美貌の男子を選び出し，これに化粧をさせて美しく装はせ，これを花郎と名付けて多くの若者に奉じさせることとした。この様な仲間達が多く集まり，互いに道義を磨き，その中のある集団にあっては歌楽を悦しむものもあれば，他の集団にあっては山野水辺を渉猟するなどという事で互いに人間性を向上させることに励むという仲間を作るという仕組みとなっていた。この様な中から，人物評価の定まった優秀な人材を朝廷に推薦するなどを専ら行っていたとされる。伝えられる所では，金大問の「花郎世記」という書がそれを記しているとされるが，その中で，賢明な補佐官や忠義な家臣が，これによっていっそう秀れたものになり，秀れた士官や勇敢な兵士がこのことにより生み出されて来た，としている。真興王時代の花郎の鸞郎の碑に，国に玄妙があってこれを風流という。その教えの基本は国仙（花郎）の書とされる仙史に詳しく述べてあるが，その内容は儒・仏・道の三教を含み人々を教化する。内にあっては家で孝行し，外に出ては国に忠誠を尽すという孔子の教え，無理をせずに物事に対処することや，不言実行を重んずる老子の教え，如何なる悪も作らず，どの様なものであれ善行を勧めるという釈迦の教えなどを含んで教化するものであるとする。この様な花郎の組織から新羅にあっては英雄偉人が輩出されたことは知られている所である。

庾信は春秋とは義兄弟であるとされる。即ち春秋の夫人，文明夫人は舒玄角干の娘であるとされ，庾信は前述の通り舒玄とされる人の子供であると言はれる。この両英雄は，第二十七代の善徳王，第二十八代の真徳王，632—654，の二代の女王の治世に活躍をしたのである。善徳王は，非常に人望があり，性格寛容で仁徳に満ち，明朗俊敏であったと云はれ，

能力も秀れている事が示されていた。父の真平王の時，唐から持ち来られた牡丹の花の図とその種子を見せられて，この花の種は出る花はきって香りのない花に違いない，何故なら，描かれている花は非常に美しいのに蜂も蝶も描かれていないからと云ったといわれる。人々がこの種子を植えたとき，香りのない花が咲いた事でそれが証されたという話が伝わっている。王の在位中に，高句麗と百済が通謀して，唐への朝貢路となっている道にある重要な城を攻め落した。攻め落された城の中に春秋の娘の嫁ぐ品釈と称する都督とその配下が多く殺された。春秋が王の使者として，高句麗に赴き，百済の新羅への進攻を止めさせる様仲介の依頼を行うこととなった。列伝庾信の条にこの間の記述がある。

即ち，善徳大王十一年（642）に百済が新羅の大梁州を敗った。春秋公の娘古陁炤娘が，夫の品釈に従って戦死した。春秋公はこれを恨みに思い，高句麗に援軍を要請して，百済から受けた恨みをはらそうと考えた。春秋が高句麗に旅立つとき，庾信に春秋は次のように言った。私と貴方とは同体で，国の股肱の臣である。今私が高句麗にいって殺害されたとすると，貴方はそのことに関して何らかの感慨を有しますかと。庾信の答は，貴方がもし高句麗に往って還らなければ，私はあわれ貴方の馬の跡をたずね，必ずや高句麗，百済両王の庭を踏みにじってやりましょう。万一にも，この様なことが出来なければ，何の面目があって国の人々に将軍として会う事が出来ましようやというものであった。二人は意気投合，互いに血の誓いを行なった。春秋は六十日で還ると云って出掛けて行った。

高句麗までの途次，豆斯支沙干なる人物が現れ，春秋に青布三百歩を贈った。筆者には未だこの人物の意味が不詳であるが，その様に記載されている。高句麗国境までは高句麗王から迎えに派遣された太大対盧の蓋金（泉蓋蘇文）が来ており，客館で手厚くもてなされた。ここに登場したこの蓋金が後に高句麗の国家の幕切れに大きな因をなした人物として本稿でも再登場の予定である。さて，高句麗王・宝蔵王は春秋に対して無理難題を押しつけて辱しめたいと考えていたので，もともと我が国の領土であったものを新羅は占領している。その土地をわが国に帰すのでなければ，あなたを帰国させる事は出来ないと云い春秋にその返答を求めた。春秋の答は，国家の土地は家臣が勝手に左右出来るものではない故，高句麗王の申出は受け入れる事が出来ないというものであった。この返答により，春秋は囚れの身となった。このときに，先の青布を王の寵臣の先道解に贈った。道解は春秋に飲食を与え，酒の進むにつれて次の話をした。「昔，東海にある国の龍王の娘が肺を病っており，医者によると兎の肝を手に入れることが出来ると薬の調合を行ない治すことが出来るという事であった。海の中には兎がいないので如何様にすればよいかと思案の所であった。亀が兎の肝を入手可能であると龍王に云った。亀は陸に上り，兎に会って甘言を

述べた。海の中の島には清い泉，白い石，茂った林，美味しい果物があり，寒暖の差がはげしくなくて，鷹とか隼なども存在せず極楽のような所である。その島に兎が行けば安楽に住むことが出来るでしょうと。この話を聞いた兎はその気になって行く事にした。亀に誘はれて，亀の背中に乗って海中二，三里泳ぎ入った所ったとき，亀は兎に云った。龍王の娘が病気になって，兎の肝を薬として治療しなければならないので亀は兎を島に運ぶために来たのであると。兎が答えた。兎自身は神の子で，体内の五臓を取り出し，これを洗ってもとに収める事が出来る。そこで，先ごろから少々心に患いを感じたので，肝臓と心臓を取り出して洗って，陸の上の大石の上においていた所であった。そのとき亀から声をかけられて，体内にとり入れなくてそのまま背中に乗せられてここまで来てしまったのでその肝などをとりに帰らないと役に立たない。その肝をとって来なければ亀も何の収穫もないであろう。自分は肝がなくても生きることが出来るので，それをとりに帰って龍王の娘にやる事が出来ると云った。亀はこのことを信じて兎を陸につれもどした。岸に上った兎は云った。亀よお前は何と馬鹿なことよ。肝もないのにどうして生きているものがあるか。その様に云って草むらの中へ逃げ込んで往ってしまった。亀はがっかりとして帰って行ったという話である。春秋は道解のこの話を聞き高句麗王に書面を差出した。曰く「新羅の占有している麻木峴と竹嶺の二嶺は云はれる通り高句麗の領土である。春秋が国に帰って，新羅の王にこの地を返還するように要請しましょう。是非私の云う事を信じて下さい。もし信を違えば天が大罰を下すことでしょう」と。高句麗王はこの書面で満足していた。その頃，新羅では，春秋が六十日を過ぎてん帰って来ない事で庾信が国内の勇士三千人を選び出し，烈士とは危機に際して一命を投げ出して国難にのぞみ，一身を顧みないものである，現在我国の宰相が他国にとらわれているのに手をこまねいて何もしないで居られるのか，と王の許可を得て出発することとなった。この事を新羅に忍び込ませていた高句麗の謀者の僧侶からの使者から聞かされた高句麗王は，さきの春秋の書面の文面からと庾信の進軍の報から，春秋を無理に止める事の必要性を認めず，庾信の豪勇の聞えから，春秋を釈放して帰国させた。国境を出るとき，春秋は云った。曰く，「百済への恨みを果すため高句麗に来て援軍を要請したが，高句麗王はそれを許さないばかりか，却って領土まで要求した。領土は家臣が勝手には出来ないのである。先に大王に宛てた書面は死をのがれる為の方策に過ぎない」と。春秋は無事新羅に帰国した。643年に新羅は唐に使者を派遣したとき，百済と高句麗が相謀して新羅を攻撃することを述べ，唐からの援軍派遣を依頼した事がある。時の唐王，太宗が答えて，新羅がこれら両国のために侵略を受けている事に対して哀れに思うと述べ，唐自身もその為従来から両国に使者を送り三国の平和につき努力し

ていると言い，両国の意図は明白で，新羅の国土を両者で分割領有する所にあるが，国家滅亡の危機を免れるための新羅の国家的対策・奇策はないかと問うて来た。この使者の返答が，新羅としては手段として何も考え得ず手づまりで，計画も尽き果てており，ひたすらこの緊急事態に対しては大国の大唐に報告して，何らかの唐からの支援により新羅の国を守りたいと考えているというものであった。太宗のこれに対する答えとして，少数辺地の軍隊を動員して，契丹や靺鞨の兵を統轄してから遼東に侵入進軍すれば一次的に両国の攻撃の手がゆるむ事となるが，継続的でない軍略である事がわかると却って両国の侵略は強化されてしまうと考えることが一つ，次には，仮に数千の大唐を想像させる朱色の軍服と幟を与えるからこれを並べて偽装して両国に対抗することが二つ，次に百済は海の要害を有することから特に兵器を充分に備えていない様に考えるから唐軍船を多く派遣し百済を海から直接攻撃が出来ると考える。しかし，そうしても新羅は婦人が王となっているので，そのことで隣国から軽んじられているし，侮られて侵略が続くこととなると考える。そこで，唐が一族の者を王に派遣しましょう。そうすると，王一人ではなく当然唐からは大軍を派遣して王を守らせ，その結果国が平安となった所で自分達の軍で防衛するということが出来るとするのが第三の策である。このいづれを策として採用するかとの問いに対して使者はただ黙って答えることを行なはなかったという。これを見て唐の太宗は嘆き，この様な田舎者では兵を求めたり，緊急事態を告げて解決を得るなどの才覚があるなど考えられないと云ったと伝えられる。当時の唐と半島諸国の関係では，隋の時代からの高句麗との抗争で積年の努力も稔らず，唐自身も手にあまるものを感じていた部分もあったが，ようやく解決の方向への動きを始めるという時でもあったのか，その後の推移からはこのときからの力の配分が増したかの感がある所が見られる。翌644年に新羅が朝貢したことに続いて，唐は高句麗への親書を出し戦争，領土侵入を止める様に伝え，その上でも新羅を攻撃する様な事あれば，来る年には唐が出兵する事を告げた。高句麗の蓋蘇文が答えて，高句麗と新羅とは，すでに以前古くからの怨みによって相互相容れない仲であると云った。そして，隋の時代からの関与にも触れ，隋が何度も高句麗への攻撃を行なっているが，その間隙を縫って新羅は多くの高句麗の地を奪っている。奪はれた城や邑は，みな新羅の根拠地となる様な所であり，それらを返還するのでない以上新羅との抗争は止められないとも云ったとされる。645年夏５月，唐の太宗は高句麗討伐を行った。このとき新羅も三万もの兵を高句麗攻撃に廻して唐と協力した所，却って新羅に進軍した百済に城を多く奪はれる結果ともなった。上大等となった伊湌の毗曇が廉宗と謀り，647年に反乱を起すと共に女王では国が治められないと云った善徳王廃位の動きがあった。再び庾信の出番となる所で，

列伝によると，毗曇，廉宗の挙兵に対して善徳王は自ら王宮内でこれを防ぎ，毗曇たちは明活城に屯し，王の軍隊は月城に軍営をという布陣で，いずれも現慶州市内，十日間以上に亘って戦闘が続いたとされる。戦闘中のあるとき，真夜中に大星が落ち月城に消えたとされる。毗曇はこれを見て，星の落ちる所に必ず流血ありという通り，必ずや女王敗北の前兆に違いない，と兵士に告げ志気を嵩めさせた。女王の方はと云えば，この話を聞き恐れおののいてなすすべなくいる所に庾信が登場する。曰く，吉兆や凶兆は定まっているものではなく，それは人が呼び寄せるものである。例えば，殷末の紂は吉兆の赤雀を得たのに亡び，また魯の国は麒麟を獲えたのに衰えた。殷の高宗は鼎のとってで雉が鳴いたことで栄え，また鄭国の定公は龍の闘争で栄えた。この様に人徳が妖（兆）より勝っていることが判っているので星の異変など恐らるに足りないことです，と王に云ったという。

落星の場所に祭壇を設け，神に告げる祭を行って次の様に云った。天道では陽が剛で陰が柔，人道では君が尊く臣が卑しいことになっている。もしこれを変えるようなことがあれば大乱となる。今毗曇等は家臣でありながら君主を謀っている。これは下から上を犯す乱臣賊子で，人も神も等しくにくむ所で，天地も容認しない所である。今こそ天の威厳が人の欲心を抑え従え，善は善，悪は悪とし，神の羞となる様なことを示さないで下さいと。

結果は庾信の指揮する王軍の勝利となり，毗曇ら九族を滅ぼし，反乱が鎮圧された。この年善徳王が没し，次いで女王の真徳王が即位したが，容姿，資質とも豊かで麗しい王であったとされる。伊湌の閼川を上大等にして国政に与らしめ，何度かの唐への使者を出したが，伊湌の春秋とその子の文王とも使者として唐へ送り，対百済の戦略を実行した。春秋は唐にあって太宗へ百済への侵略防止への唐の加勢を強く依頼を行ない，太宗軍の出兵に関し同意を得る迄の大貢献を行なった。その間，春秋の申出による新羅礼服への中華制度の導入，文王の更なる唐への滞在宿衛など新羅への唐の積極的関与の強大策を行って帰国することとなる。春秋にとっては，その唐訪問はその将来の運命にまで大きく関与するものであったもので，660年の唐高宗の蘇定方･金仁問の百済討伐を招来する因を作ったものであるとも考えられ，又，個人の生命を強運にも永らえる事を経験したものとも考えられるものであった。このとき，帰途，海上で高句麗の巡邏兵に検問される事となり，多くの将兵と高句麗兵に対応したとき，春秋の従者の温君解が背の高い冠を頭上に，正装して船内上座に坐り高句麗兵の注目を引き，捕えられるなどの作戦を用いてくれたことにより無事に逃げおえる事が出来，帰国することとなった。650年に至り，新羅は中国の年号を用いる事を始めた。これより先に新羅が朝貢し，邯帙許を使者として太宗の代に訪問を行なわしめたとき，新羅の年号が，元号として太和を用いていたのであるが，中国のものと異

る事をとり上げ，御史に問はれたという事があった。そのときの邯帙許の答えが，唐に対して臣として仕えている新羅であっても，いまだかつて唐は新羅に暦を頒ち与えて，その元号を用いる様に命令されてはいない。それ故，法興王以来，新羅独自の年号を用いているので，唐からの命であるならば新羅もそれに反対する様なことがないという答えを行ったとされる。太宗はそれを勿であると了承してその事は話題がそれ以上進まなかったようであった。この年の前年に春秋の申出から，中国の衣冠を着用することとなっていたが，今度は中国の年号，永徽を用いることとなった。この翌年の正月，朔の日，王が朝元殿に出御し，百官から正月の賀礼を受ける，賀正の礼が新羅では始めて行なはれた。真徳王の薨去の后，654年春秋は太宗武烈王·新羅第二十九代となるのであるが，その際，伊湌の閼川を多くの臣が推薦して王位に執くよう希望した。善徳王時代からの大将軍で，貴族会議の座長も務める人望のある忠臣で，上大等になり政治を行なっていた。閼川は推挙に対して辞退して，曰く，「私はすでに老いこんでいます。そのうえ，人徳もなければ，業績もとりたてていう程のこともない。現在人徳もあり，人望もきわめて高い人物は春秋をおいて外にない。彼こそ，まさに新羅を救う英雄と云うべきである」と。閼川の推挙により群臣も春秋を奉じることに賛成し，春秋の再度にわたる辞退も願い出に負けて王位を継ぐことに決まった。660年に至り，伊湌の金庾信を上大等にした。この年に先に述べた唐高宗の征百済軍が進軍，新羅も参戦する様命ぜられたのである。「三国史記」，百済本紀第六，義慈王（641—660）二十年が660年であるが，によると，六月，王興寺の多くの僧が，みな船が大水に乗って寺門を入って来る様な光景を見たといったり，鹿の様に大きな犬が西から泗沘河の河岸に来て，王宮に向って吠えていたが，突然見えなくなり，それらの行方がわからなくなった。そして，王都の犬の群れが路上に集まり，吠えるものあり又唯哭いている様子のものであったが，しばらくの後四散していなくなってしまいました。一匹の鬼が宮中に入り，大声で「百済が亡びる，百済が亡びる」と叫び，すぐ地下にもぐってしまった。王がこれを怖れて，その地下を掘らせた所，三尺ばかり掘った所に亀が一匹いて，背中に百済同月輪，新羅如月新という文が書いてあったという。この意味をたずねて巫に問うた所，満ちれば欠け，いまだ満たなければ次第に満ちるという事であると云い百済の衰亡を予言したので，この巫は殺されるに至った。この頃，左衛大将軍の蘇定方を神丘道行軍大摠管とし，左衛将軍の劉伯英，右武衛将軍の馮士貴，左驍衛将軍の龐孝公などを率いて十三万の軍隊が百済西部の徳物島まで進軍して来た。義慈王はこれに対抗すべく，出戦か籠城かなど群臣に問うた。佐平の義直は唐と新羅の連合軍のうち，唐軍を打ち敗るのが一番としたが，達率の常永は唐軍の道を塞ぎ，新羅軍を襲撃させ鋭気をくじくのが一番と云っ

て結論が得られないでいた。佐平の興首が当時罪を得て流されていたが，この興首の意見を問うと，「百済軍がこれら両軍と闘うにも平野･広野で対陣するならば勝負はどの様になるか不明であるが，百済にとって炭峴と白江は誇れる要衝である。一夫・単槍でも万人が対抗出来ない所であると考える。勇士を選び，これらの地を守らせるのが最良と考える。唐軍を白江に入れず，新羅軍に炭峴を通らせず，大王は籠城して固守し，敵軍の物資・食糧が尽き,兵士の疲れるのを待って,その後に奮戦すれば必ず敵軍を破ることが出来る。」と云った。この興首の意見に対して大臣達は長く獄中にあった人間の，君を怨み，国を愛していない所から出る意見は採用出来ない。唐軍を白江に入れ，流れに沿って舟を並べることが出来ないようにさせるのが一番である。又新羅軍には炭峴にのぼらせ，小径のために馬を並べることが出来ないようにするのが宜しい。このときに出兵し両軍を襲撃すれば網にかかった魚を殺すようで簡単であるとの意見を出した。王はこれら大臣の意見に従い唐軍に敗れる結果となった。成忠の意見をとりあげ得なかった王自身の不明を恥じながら降伏した。百済は，このあと，福信が僧道珠とともに反乱を起し，倭国の質となっていた扶餘豊を迎えて王となし，再び唐・新羅に対抗をすることとなり，唐軍の劉仁願，劉仁軌らの軍と戦い却って唐軍を圧倒する勢いであった。唐軍は孫仁師などの援軍をもって福信の軍と戦はしめたが異変が起った。福信と豊との間での不和が起り，福信が殺害されるに及んだ。豊は高句麗及び倭国に援軍を要請し戦闘を続行するのであるが，唐・新羅軍が周留城に籠る豊などの百済軍を攻め，その攻撃が倭軍と白江口で遭遇した事四度で，そのいずれもが唐・新羅連合軍の勝利となり倭軍の舟四百艘を焚いたとされる。その煙や炎は天をこがし,海水は白くなったという記事が662年百済本紀の条に見られる。王の扶餘豊は行方別らず逃走，高句麗に逃れたのかとも記されている。この白村江の戦いは，書紀にも記されているが，新羅本紀によると，663年の条に（文武王に対する薛仁貴の信書とそれに対する王の返書の記載の中で)，「孫仁師が兵を率いて熊津府城を救援に来た。新羅軍も又これに同行して出陣，両軍が周留城に到達したとき，倭国の兵船が百済を救援に来た。倭船は千艘もいて，白沙に停泊し，百済の精鋭は騎馬隊がその岸辺で船団を守っていた。新羅の強力な騎馬隊が唐軍の先鋒となって岸辺の陣地を撃破することで百済軍は降伏した」と記されているのを見出す。倭国の大いなる敗戦が，これらに見られる所である。唐・新羅の向う所，高句麗となって来た。蓋蘇文が642年に栄留王を弑逆，宝臧王をたて，政治を行なっていた。先に述べた金春秋が，百済討伐の計画で出兵を求めに高句麗を訪れたのがこの年である。唐に対する高句麗の新羅への対応の言い分も蓋蘇文の言葉で先に示した通り非常に戦闘的なものであった。これらの高句麗の態度に対して，唐の太宗は「蓋蘇文は，

その君主を殺し，その大臣も賊し，又その民に残虐を働いた。今我々の紹命に逆う様では，必ずやこれを討とう」と云ったとされる。644年秋に蓋蘇文が唐に白金を貢上した際，唐の諫議大夫の褚遂良（書で著名な人物）が，莫離支の蓋蘇文は，その君主を殺害したが，その行いは九夷といえども容認し得ないところである。今こそ高句麗を討つべきであるのに，この白金を受納なさるのは郜鼎の類である。受けるべきではありませんと太宗に進言し，太宗はこれに従ったとされる。この時，使者が，高句麗として官人五十人を派遣して唐朝に宿衛させたいと莫離が申出ている，と述べたが，それに対しての太宗の答えは厳しいものであった。曰く，「お前達の官庁は，みな高武（栄留王）に仕えて官爵を受けている筈である。莫離支が王を殺して，欲しいままに政治を行なっているのに，お前達の官庁ではそれに復讐しないだけでなく，いまさらに彼の為に遊説して大国を斯いているのか。その罪はいずれが大であるのか」と大いに怒ったとされる。列伝によると，蓋蘇文（蓋金とも云はれる）は，姓は泉，水中で生まれたと自称し大衆を惑わしていたと云はれる。容貌は勇ましく，その意気は秀れていた。父の東部（又は西部とも云はれ，詳かでない）大人の大対盧が死去した際に，当然その後を継ぐところであったが，国の人々は彼の性格が残忍狂暴であるので大対盧に擁立しなかた。その際，蘇文は頭を地につけて謝り，父の官職を継ぎ，もし不都合が生じれば廃されても悔いはないからと乞うた。人々はその心情を良しとし，父の位を継ぐことを許した。しかしながら，相変らず凶悪非道をくり返し行い，国の大人たちの意に反する事が多くあったので，蘇文を殺害する密議が計られた。この事を蘇文が知るに及んで，百余名の官人達を殺害，その後栄留王まで殺害，しかもその死体を切り刻み，溝に捨てたとされる。この蘇文の行状に多くの人達は反抗出来ず，国民はその非道に苦しんでいたとされる。唐の太宗がこれらの行状に対して，又従前からの新羅との対応及び唐歴代の高句麗討伐の歴史に鑑みて，高句麗討伐を再度行う様臣にはかったとき，長孫無忌が暫時の様子見を薦めた言葉に，「蘇文は，自分の犯した罪の大きさを知り，大国が討伐に来る事を恐れて守備を固めています。今しばらく唐としてはこれを耐えて彼の専横が益々重なるときまで時を過させよう。その後で，十分悪名高くなった所で討ちとっても遅くはないのでは」というものがあり，太宗は従ったとされる。この蘇文が666年に死去した。668年秋９月，李勣率いる唐軍が平壌城を陥した。高句麗滅亡。